

## ベトナム農村部におけるソーシャルサポートの構造

### ー 地域共同体の補完システムの検討 ー

○ 東北福祉大学 後藤 美恵子 (7009)

Key words : ベトナム社会・ソーシャルサポート・地域共同体

#### 1. 研究目的

ベトナム社会主義共和国（以下、「ベトナム」と略す。）においてドイモイ政策（1986）は、伝統的な村落共同体がかかえる因習的な人間関係に影響をもたらし、家族構造型社会の近代化を促す契機となった。都市部では核家族化が進展し、農村部では、経済成長が低迷したことで、農村労働者の失業が増加した。特に若い世代の人たちの農村部から都市部への人口移動が顕著となった。同時に高齢者の扶養問題がベトナム社会に顕在化し、基礎的な社会集団である「家族」の家族機能や地域社会の生活構造にも大きな影響を与えた。市場経済化は、すべての国民の生活水準向上には直結せず、むしろ貧富の格差を拡大させ深刻な社会問題を派生させ、身寄りのない高齢者などの社会的弱者は、困難な生活を強いられている。家族関係や地域社会との関連性からソーシャルサポートは、精神的・身体的に効果的な影響を与えると考えられている。また、精神的健康に関して言えば、ソーシャルサポートは、感情・認知・構想に反応システムの調整を維持し、機能不全に伴う反応システムの過剰反応を防止すると考えられている。

ベトナムの人口動態の推移状況では、2017年の高齢化率は5.81%で、5年後の2022年の伸び率は1.24ポイント上昇し7.06%となり、高齢化はますます進展し高齢者問題が顕在化することが予測される。また、経済発展と人口移動は表裏一体の関係であり、特に農村部での高齢化率は都市部以上に進展することが予測される。本研究では、農村部の高齢者におけるソーシャルサポートの構造が地域機能との関係から生活にどのように作用しているのか、その関連要因を検証することによって、人口移動を含めた地域における社会組織の再編として、地域共同体を補完するシステムの検討を目的とした。

#### 2. 研究の視点および方法

調査は2017年2月に南部地方の農村部において65歳以上の高齢者を住民台帳からランダムサンプリングにより50名を標本とし訪問調査を実施。本研究で用いた指標は、基本属性、ソーシャルサポート（岩瀬ら,2008）、モラル・主観的幸福感（Lowton,1975）、（前田ら,1989）、生活認識、地域意識について回答を求めた。

#### 3. 倫理的配慮

調査は Binh Thuan 省・Lagi 人民委員会に内容申請にて許可を取得。対象者には事前に趣旨と概要を説明し承認を得た上で無記名自記式・任意回答で実施した。

#### 4. 研究結果

対象者は男性 44%、女性 56%。平均年齢 84.12±8.72 歳、最高齢者は 99 歳男性。出身

地域は、北部と中部からの流入者が 92%と圧倒的な数値割合であった。家族構成は三世代が 6%で縮小家族の形態が顕著であった。経済状態において 54%が不満感を持っていながら政府の支援について 98%が満足していた。

ソーシャルサポートについて、岩瀬ら（2008）が開発した尺度（DSSI-J）を使用し、「情緒的サポート」と「手段的サポート」の各因子の項目の合計得点を従属変数とし、 $t$  検定によって関連要因の分析を行った。「情緒的サポート」は、モラールでは、#5 不安による不眠 ( $p<.05$ )、#12 満足感 ( $p<.01$ )、生活認識では、#1 家の力仕事 ( $p<.05$ )、#5 経済状態 ( $p<.05$ )、地域意識では、#5 近隣との関係 ( $p<.05$ )、#7 ボランティア活動 ( $p<.05$ )、手段的關係では、#2 買物 ( $p<.05$ )、#8 仲間 ( $p<.05$ )、#9 問題 ( $p<.01$ )、#10 アドバイス ( $p<.01$ )、#11 移動手段 ( $p<.$ )、#12 食事 ( $p<.05$ ) において有意差が認められた。「手段的サポート」は、病気 ( $p<.05$ )、モラールでは、#1 加齢 ( $p<.001$ )、#3 寂しさ ( $p<.05$ )、地域意識では、#5 近隣との関係 ( $p<.05$ )、#7 ボランティア活動 ( $p<.001$ )、情緒的關係では、#1 ( $p<.001$ )、親族関係、#6 親族理解 ( $p<.01$ )、#7 親族相談 ( $p<.05$ )、#9 トラブル ( $p<.05$ )、#10 重要事項 ( $p<.01$ ) において有意差が認められた。

## 5. 考察

ソーシャルサポートは、中立点より否定的な方向へ傾いていた(25項目中 16項目 64%)。生活の共同体をもった地域の境界線は全般に拡大・拡散し、社会圏による格差や構造も多様化している。伝承されてきた伝統文化を保持した上での近代化という意味で、伝統的思想の存在のみでは、加齢に伴う疾患などに対する具体的な支援体制が取れない。したがって、伝統的な価値に基づく近代との融合の観点から、地域機能を考える必要があると言える。また、ソーシャルサポートは、自分自身や家族等の親しい人に対する身体的な問題と結びつく否定的な感情は、ソーシャルサポートを通して心理的に否定的な感情を軽減させていくことができるとしている。身近なソーシャルサポート体制の有無によって健康感に影響を及ぼすことを踏まえ、人口構造及び高齢化の進展に伴う加齢による身体的な影響に対する対処資源として、ソーシャルサポートのシステム化が不可欠であると言える。

生活認識の結果から、経済状態は 54%が不満としながら、国から受ける支援に対しては 98%が満足だと認識していることは、国に対する期待度の表出だと解釈できる。一方、専門の相談員は 90%、専門の介護職員は 94%が必要であるとする高い数値結果は、外部機能として生活保障を政府に求めていると推考される。さらに、他の地域からの流入者の比率割合が高いことから、地域社会と共同体の相互作用の結びつきの不安定さが推考される。

今後、ベトナムの高齢化が確実に進展することが予測される中で、社会的関係の豊かさが長生きするという知見を踏まえ、人口移動に伴う家族構造、地域機能の変容に対し、地域共同体の補完機能、及び社会システムとしての機能の両側からのソーシャルサポートの検討が今後の研究課題として示唆された。

[本研究は、JSPS 科研費 15K03947 の助成を受けたものである。]